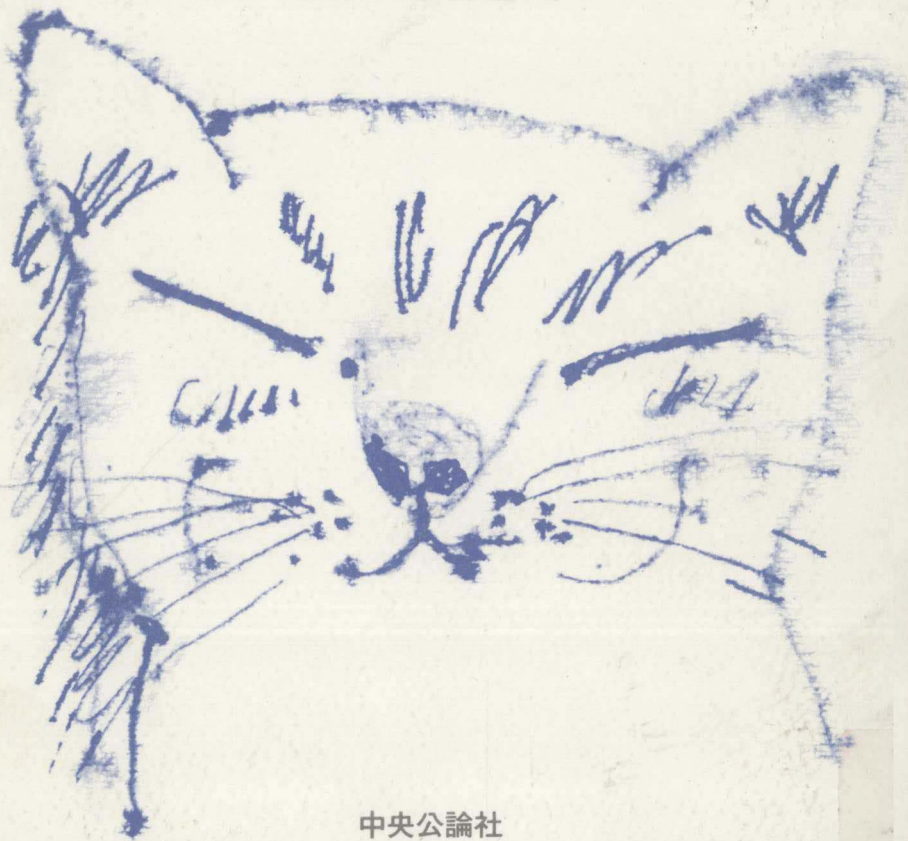


猫の縁談

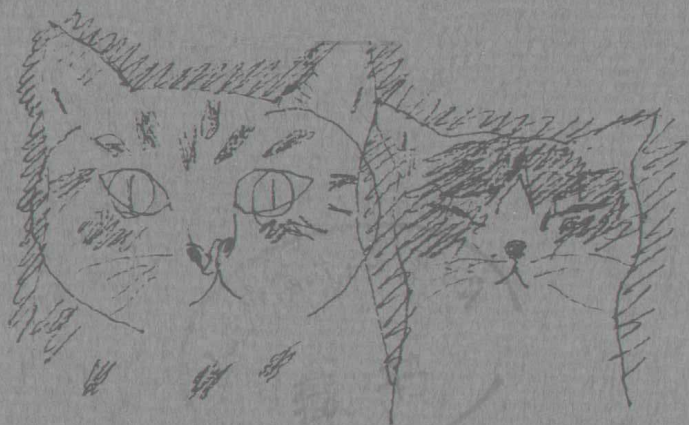
出久根達郎



中央公論社

猫の縁談

出久根達郎



中央公論社

でくねたつちう
出久根達郎

1944年、茨城に生まれる。1973年から杉並区高円寺で古書店を営む。著書に85年『古本綺譚』、87年『古書彷徨』（共に新泉社刊）がある。87年、ベスト・エッセイ集『おやじの値段』（文藝春秋刊）に同題のエッセイが収録される。

猫の縁談

一九八九年三月二〇日初版発行
一九八九年五月一〇日三版発行

著者 出久根達郎

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八―七

振替東京二二三四

〇一九八九 検印廃止

ISBN 4-12-001780-X

目次

猫の縁談 5

腹中石 41

そつじながら 79

とおいつ 113

猫阿弥陀 141

あとがき 246

装帧
山城隆一

猫の縁談

猫
の
縁
談

蚤の捕り方の本はないかと尋ねられた。

驚いて聞きかえすと、なに猫の蚤である。あいにくそういう書物はなかったが、江戸時代に猫の蚤とりを業とする者がいたと話した。方法は簡単で、片手に狼の毛皮の手袋をはめ、湯で洗った猫の頭と尾をそれで撫でるだけ。蚤は狼の毛を好むらしく、いっせいに飛び移る。猫一匹に三文とった。使用後の手袋の処置は知らぬ。

狼皮の手袋はさぞかし目がとびでるでしょうね、と客は溜息をついた。そこでいまはベツトシ^マップでそれ用の狭い歯並びの櫛を販売していると教えた。もったいぶって話したが、いずれも村国さんの受け売りである。

ゆくりなくも「猫じいさん」を思いだしてしまった。

私は場末の古本屋であるが、ひと昔まえの型の乳母車を押して、店の表の均一台を丹念にのぞいていく老人がいた。老人は三度に一度は買った。くたびれたジャンパーをはおり、店に入ってくるとなんだか熱いような臭いがした。

帳場の壁に、十八年生きた愛犬の写真額が掲げてある。あるとき老人が金を払いながら額のいわれを問うた。説明すると、大事にされて良い後生を得たろう、というような意味の世辞を言っ

た。老人は齒がないせいか、言葉が煙になってしまつて、よく聞きとれなかつたのである。

それから三日にあげず現われるようになった。帳場にきてはいつとき何やら話していく。鈍感な私にも相手が謎をかけているらしいのがわかつてきた。

ある晩、老人が店に客がいないのをみはからつて乳母車を乗りいれてきて、いきなり勘定台にバケツのようなぶち猫を置いた。猫はギョツとしたように私を見たが、見られた私もギョツとした。老人がせきこむように笑いだした。毛皮を何枚も重ね着しているような肥えたぶち猫は、馴れやすいのか店を見まわしながら、やがてのどを鳴らしはじめた。

「ずいぶん良い毛艶をしていますね」

しかたなく私はおべんちゃらを言った。しかし實際は相当の年らしく、毛先が荒れていた。老人が嬉しそうに笑いながら、猫を抱きあげた。かなりの重量らしく老人は二、三步よろめいたのである。

それがいわば老人の魂胆であつた。老人は実にさりげなく自分の飼ひ猫を私にお目見得させたのであつた。

次に老人が見えたとき、私は機先を制して「こまります」と、こちらの意向を伝えた。

動物を飼わないでくれ、と大家からかねがね念を押されていること、十数年飼つた犬は妻が嫁入りの際お供につれてきてしまったため一代限り特別に認めてもらったこと、客商売をしている以上、動物は無理とあきらめていること、等を少しく強い調子で語つた。私としては引導を渡しなつてもあつた。

老人は黙つて聞いていたが、

「わしの本をもらってくれる者はいないだろうか？」と、まったく別の、そのような意味の言葉をつぶやいた。聞きただすと、こういうことだった。

老人宅にはかわいがっている猫が三匹いる。自分は高齢だし、しかも男やもめである。万が一の事があった場合、残された猫の面倒を誰がみてくれるか。五体満足なうちに、三匹の身のふりをきめ、幸せな余生を送らせてやりたい。しかし子猫ならまだしも、三匹は人間の年齢でいうなら飼い主とおっつかっつの、行かず後家である。誰が好きこのんでもらってくれよう。

それなら、と老人は思いついた。老人が猫の次に大事にしている古書を、嫁入り道具にもたせよう。持参金の高でつれあいを釣るみたいで気がひけるが、飾ってもいられぬ、と老人は考えたというのである。

伺ってみればふびんな話であった。私は老人に自分の軽率を詫び、そういう苦境なら及ばずながら一肌ぬぐうと乗った。

「本の好きな人間は本を大事にする。本を労る人間は動物も粗略にすまい」と老人が機嫌を直した。

その論理はどうかと思われたが、そうですねとあいづちをうった。

「どういう本をご所持ですか。リストをだしていただけると助かります。その本をほしそうなお客さまにまず当ってみますから」

翌日、さっそく老人が新聞紙にくるんだ本をもってきた。『星座の花嫁』という、棟方志功の色刷り木版画集である。十枚セットでしやれたタトウにおさまっている。私が初めて目にする画集であった。

「たしか限定十部じゃなかったろうか。大正の終り頃こしらえたものじゃと思う」と老人が説明した。

「棟方のごく初期の作品ですね」

「五万円で売りたい」と老人が胸をそらせた。

最初、相手が何といったかわからなかった。聞きかえすと、老人が大声で復誦した。話が違うのではないか。猫をひきとるなら本を進呈するという約束ではなかったか。

「そうは決めんぞ」と老人が抗弁した。「そんな馬鹿をもちかけた覚えはない。だいたい本をただでもらおうなどという、さもしい根性の人間に、大事な娘を預けるわけにはいかんぞ」

老人はしだいに激昂し、私をのしりはじめた。店が修羅場になっては工合が悪い。不本意ながら自分の勘違いを謝罪した。

「話は、それで、ご破算かね？」と老人があざけるように顔をしゃくった。

そうまで詰められると、ゆきがかり上、手をひくわけにいかなくなった。しかし、むずかしい新規まきなおしである。世にも珍しい本とはいえ、老猫ごと買いあげてくれる奇特な人間が、果しているだろうか。当るだけ当ってみよう。私は老人をなだめすかし、棟方志功はいったん持ち帰ってもらった。

私は村国さんという客に、以上の次第を包まず話した。

村国さんは、私が開業したての頃、音もなく店に入ってきて、なんだかおどおどと落ちつかず、私がひそかに警戒していると、

「あのう、つかぬことをおたずねします」と声をかけてきた。

「小説家の先生の、色紙、というものがありませんね？」

早口で、うわずっていた。

「あれは、どういう手続きをふめば、書いてもらえるんでしょう？」

「入手方法ですか？」

「是非ほしいんですが、私、しろうとなんですから、さっぱりわからないです」

「それは私どもでも扱っておりますよ」

「高いんでしょうね」

「まあ筆者によってピンからキリまでして」

「私××先生の小説が大好きなんです」

村国さんは現存作家の名をあげた。

「寝る前に必ず作品の一節を朗誦する程なんです、先生のものは私なんかには高嶺の花でしょうね？」

およその相場を告げると、相手は信じられぬという表情をした。

「あの、何十万もするものじゃないんですか？」

額のべらぼうに私の方がのけぞった。

村国さんは金持ちなのである。何を業としている人か今だに見当もつかないが、そんな会話がきっかけで急速に親しくなった。

村国さんは作家の色紙や短冊、書簡類をことのほか喜び、私が仕入れてくるのを片端から買いあげてくれた。それだけではない。お買い得だとすすめる本は、無条件で買ってくれた。安いも

高いと言わない。しかし村国さんはものを買うのが好きなのであって、本を読むのが趣味ではなさそうであった。本は今だに××先生一本槍。先生の新入荷品は、うっとりと掌でしばし愛撫するのが常であった。人目があるうがあるまいが、お構いなしてひたつてしまうのである。

「あの、それは、よっぽど珍しい本でしょうか？」

村国さんは私の話を聞き終って反問した。

「稀覯本です。そもそも棟方志功の多色刷り版画自体めずらしいんじゃないでしょうか。あの方のはおおむね手彩色のようですから。お墨付きの掘りだしものですよ」

「私、それ、いただきます。五万円ですわね？」

村国さんは意気こんだ。

「ただし先刻申しあげたように、コブつきですよ」

「どの位の図体なのでしょううか？」

村国さんは瘤の嵩ばかり気にしていた。私はバケツ位あるとおどした。

「そりゃいくらなんでも」

村国さんが笑った。

「私、生き物を飼った経験がないんです。まず虫が嫌いでした。虫めがねでカマキリの頭をのぞいたことがあります。こう黄金バットが、ご存じですか黄金バット？ あれがマントを広げて飛びかかってきたように錯覚しましてね、いやあこわかった。あのカマキリの頭を見て以来、もうだめです。でもそんなでかい猫なら多分こわくないと思うな。虫めがねより大きな顔をしているんでしょう？ その猫」

生き物を育てるのは厄介だから熟慮した方がよいと忠告した。安うけあいをするので心配になつてきた。

「まあ、大抵、大丈夫でしょう」

本当のところ村国さんは自信なさそうであつた。

「奥さんや子供さんが反対しませんか？」

「いやあ。私、ひとり者なんですわ」

悪いことを聞いてしまったようだ。

「別れたんですわ、むかし。生き別れです」にが笑ひした。

「実をいいますと逃げられたんです。私、それから古書を集めるようになったんです。本は、口答えしませんし……裏ぎりませんもの」

「とにかく、——」話をさえぎつた。身の上話は苦手であつた。

「もう一度、冷静に検討してみて下さい。大丈夫、この本の話、他の客には流しませんから」

「私、内金いれときましようか？」

「かえって村国さんががんじがらめになりますよ。他人行儀はよしませうよ」

村国さんは太い溜息をついた。つくづくと嘆じた。

「なんだか釈然としない、これは取引ですなあ。本と猫が一對だなんて」

「まったく」

考えてみれば私も割に合わない話に乗ってしまったものだった。

翌日、「猫じいさん」がまた新しい本をもちこんできた。

藤村の『一葉舟』の初版ともう一冊、兎の絵の表紙の鏡花小史著作『田毎かゞみ』これも初版本である。いずれも良好の保存状態で、ことに藤村のは、南蛮船の図案をあしらった美麗な袋カバーがついており、発売時の形態を備えている。袋つき美本はきわめて珍しかった。古書市場で三十万円をくだらない。『田毎かゞみ』は十万円程度である。

「両方とも五万円でもよろしい」と老人が踏んだ。

厄介な付録つきでなければ私が買いたい位であった。

この二冊は、打診した客の誰もが眼を輝かせ、是非にと所望した。しかし皆考える筋道は同じで、本を手に入れたら付録は内密に処分する算段なのである。それではこまる。あらかじめ老人に釘を一本さされていた。

「一カ月に一度、猫の近況報告を怠るべからず」

それも条件のひとつであった。いなくなりました、では、すまされないのである。

明治時代の文学書を収集している客のひとりに、会津さんがいた。

会津さんの本名は知らない。会津若松の生れなので便宜上、私がそう呼びそのうちそれが実名のようになって、会津さん自身、今では葉書にその名を記してくるようになった。武道の話題が大好きで、初版本を集めている人とは思えない。むかし北辰一刀流をかじったことを私が何かの折もらしたのがきっかけで、馬が合った。

「これは異なるかな」と言いまわしからして武張っているのである。

「おれも藩校日新館で行われていた一刀流を学んだ者。いわば同流のよしみ。いつか手合せ願